

國學院大學學術情報リポジトリ

前方後円墳の築造と儀礼

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塩谷, 修, Shioya, Osamu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002412

塩谷修 学位論文『前方後円墳の築造と儀礼』要約

本論は、前方後円墳の築造と儀礼を論題に、古墳における祭祀儀礼の系譜と思想的背景、およびそれに関連する古墳時代の政治動向について考察したものである。前方後円墳の築造過程でおこなわれた種々の儀礼に注目し、それが喪葬儀礼であると同時に政治的儀式として重要な意味をもっていたと考える。そして、とくに墳丘での土器祭祀や埴輪配置の分析を中心に、儀礼の体系とその系譜・変遷を究明するものである。そうした視点から前方後円墳の歴史的意義と古墳時代の特質を再検討することが、本論の基幹に据えられた研究課題である。

序章では、問題意識と儀礼研究の必要性を述べ、過去の研究史を詳述して問題点を整理した。前方後円墳の築造自体が儀礼としての本源的な意味をもっていたとの考えから、古墳築造とそれに伴うあらゆる喪葬行為や儀礼行為を包括して捉えるために、「前方後円墳築造儀礼」という新たな分析概念を提示する。そして、具体的な検討課題として、①祭祀儀礼の系譜、②祭祀儀礼の秩序と階層性、③祭祀儀礼の波及と政治動向、④祭祀儀礼の場と形の変遷、⑤祭祀儀礼からみた後期古墳の変質、⑥前方後円墳の時代的特質と画期、を措定した。

以下にまとめる各章は、上記の前方後円墳築造儀礼の観点から、おもに土器祭祀や埴輪配置の論題とその考察を中心に構成したものである。

第1章「前期古墳の土器祭祀 ―関東地方を中心に―」は、関東地方の前期古墳から出土する土師器を取り上げ、その出土状況と器種構成から土器を用いた祭祀儀礼の類型化を行い、その変遷や地域性について考えた。また、土器祭祀と古墳の属性、とくに墳形との相関に注目し、弥生墳丘墓の伝統をひく埋葬施設上の土器祭祀が初期の前方後方墳に多く、前方後円墳には顕著でないこと、壺形土器の配列が大型前方後方墳に特徴的であることなどを明らかにした。

さらに、天皇陵古墳からわずかに発見されている土師器から、畿内大型前方後円墳の編年観や喪葬儀礼の特徴についても言及した。とくに最古の巨大前方後円墳奈良県桜井市箸墓古墳における器台形埴輪と壺形埴輪の萌芽、成立に注目した。また、この時期を境に埋葬施設上の土器群が周縁に移動し、埋葬施設内への土器副葬が出現するなど畿内大型前方後円墳における土器祭祀の変革も示唆した。

第2章「埋葬施設上土器祭祀の系譜」は、東日本とくに関東地方の出現期古墳には、埋葬施設上における壺、器台、高杯形土器を用いた喪葬祭祀が顕著であることに注目した。この儀礼の母体は千葉縣市原市神門4号墓など弥生時代終末期の在地首長墓祭祀にあると考え、その淵源は、吉備を中核とする山陽、山陰地方の弥生時代後期から終末期の墳丘墓祭祀であろうとした。

弥生時代墳丘墓祭祀の東日本への波及には、吉備勢力の主導的意志に基づき東海西部地域が関与しており、吉備を中核とする在地首長層間の緩やかな連合関係が弥生時代終末期の東海・関東を含めた比較的広範囲に成立していたと推測した。こうして、吉備に遡源する墳丘墓祭祀が関東の出現期古墳に継承されているのは、初期大和政権が古墳出現の契機とも言うべき政治的連合関係の形成にあたり、先のような吉備中枢の首長間交流をとりこんだ結果と考えた。

第3章「壺形埴輪の性格と歴史的意義」は、古墳時代前期の円筒埴輪と相対峙する儀礼装置と

して壺形埴輪を検討した。両者は、前方後円墳出現時の大和でほぼ同時に成立したと考えられ、壺形埴輪は畿内の墳墓祭祀を起源とし、円筒埴輪は吉備の墳墓祭祀を起源とする。

本章の検討は、壺形埴輪とともに、前方後方墳の特質にも注目すべき結果となった。壺形埴輪を全国的に集成すると、東日本と九州に多く、東日本では大型の前方後方墳に多く伴うことを明らかにした。一方、東日本の初期円筒埴輪は、大型前方後円墳に顕著で前方後方墳には皆無に近い。円筒と壺形二つの異なる埴輪は、弥生墳丘墓からの儀礼的系譜と出自を背景として、前方後円墳を前方後方墳より優位とする階層秩序と同様に、優劣の関係をもって生成されたと考えた。

第4章「前方後方墳の築造と儀礼の波及 ―東山道・東海道東縁からみた前方後方墳の特質―」は、東日本に濃密に分布する前方後方墳について、その東端境界域に位置する上野、下野、常陸の前方後方墳からその歴史的 성격についてアプローチした。

前方後円墳に対峙する前方後方墳の儀礼的特徴と共に、上野と下野・常陸との間に認められる前方後方墳の二面性に注目し、前者には弥生時代後期以来の東海地方との強い関係性が、後者には大和政権との政治的、戦略的関係性がうかがわれた。また、後者の政治的動向は、第5章の東海道筋における出現期大規模前方後円墳の築造とも連動したもので、古墳時代前期前半における大和政権の東山道に対する東海道重視の指向性が想定された。

第5章「前方後円墳の築造と儀礼の波及 ―器台形・壺形埴輪の検討―」は、常陸北部の出現期前方後円墳である星神社古墳・梵天山古墳の二基の大型古墳とその古墳群を俎上に上げ、初期埴輪の祭祀儀礼の特色とその波及について考察した。

星神社古墳と梵天山古墳の二基の大規模前方後円墳における、器台形、壺形埴輪の年代と儀礼の系譜、及び古墳群の構成や推移を検討した。その結果、大小二基の大型古墳が並立し、前期から中期へと継続する地域的特性が想定され、墳丘規格や埴輪に特徴付けられる前方後円墳の築造と儀礼の波及にみる当地域の政治的、軍事的重要性について言及した。

第6章「土器祭祀の展開と「造り出し」の成立」は、古墳時代前期から中期への変化を、前方後円墳の築造と儀礼の推移から跡付けたものである。古墳築造に伴う土器祭祀が顕著に認められる関東地方の当該期の変化に着目し、埋葬施設上の土器祭祀及び墳頂部に配列された壺形埴輪の終焉、畿内型高杯と埴形土器祭祀の普及などを意味ある変化として指摘し、いずれも大和政権が専制化へと始動する政治変革によるものと推定した。

さらに、前期大型前方後円墳の後円部に取り付く台形状施設を検討し、墳丘への入口施設から転化した土器や土製品を用いる喪葬儀礼の場と考えた。上記の埋葬施設上土器祭祀の終焉や畿内型高杯・埴形土器祭祀の普及などの祭祀儀礼の変化と連動し、古墳時代中期に定型化する「造り出し」の起源とその成立へと導いた。

第7章「盾持人物埴輪の特質とその歴史的意義」は、古墳時代中期初頭に出現し、最初に人物を表した埴輪である盾持ちの人物について、全国的な集成を行いその特質を抽出した。この埴輪は、古墳時代中期から埴輪が終焉する後期末葉まで、地域的にも時期的にも普遍的に存在する極めて重要な人物埴輪であった。とくに形態的な特徴から、その原形は、古代中国の葬送を先導する「辟邪の方相氏」であると考え、思想的背景として、中国漢代から南北朝期に隆盛する神仙思

想に基づく他界観念があったことが窺われた。

本章のねらいは、人物埴輪配置の本質にある。その本質は、神仙思想に基づく他界観の導入を契機として、前方後円墳において執行された他界の演出に他ならないと結論付けた。古墳時代前期から後期へと継続し発展する埴輪配置と演出された他界の情景からみて、前方後円墳の築造と儀礼の一貫した理念は、「辟邪と奉仕」にあると理解された。

第8章「家形埴輪と前方後円墳の儀礼」は、全国から集成した家形埴輪を形態と出土状況から分類し、その分布と変遷を跡付けた。家形埴輪は最も古くから古墳に配置された形象埴輪で、前方後円墳の築造に伴い時期的にも地域的にも普遍的に認められる重要な象徴的な存在である。

検討の結果、家形埴輪の中でその出現期から終焉に至るまで最も重視された形式として、入母屋造高床建物が注目された。その原形は、日本の家屋紋鏡や子持ち家形埴輪にも現れ、中国漢代の墓室画像石に遡る楼閣建物と想定し、家形埴輪を中核とする前方後円墳の儀礼とその思想的背景を示唆した。家形埴輪は、前方後円墳に他界を演出する象徴的な装置として鶏形や蓋形と共に最初に用意された必須の形象埴輪であり、本章の検討から、昇仙する被葬者を迎え入れる楼閣建物として重要な役割を果たしていたと考えた。

第9章「古墳時代後期の前方後円墳と儀礼 ―常総地域における後期・終末期古墳をととして―」は、常総地域は古墳時代に形成された地域圏にその源流があると考え、このような一定の歴史的・社会的領域における後期・終末期古墳を題材に前方後円墳と儀礼について検討した。国造制やミヤケ制の成立、群集墳の成立など、政治社会的に変革の時代と言われる古墳時代後期の位置付けについて検証するのが第一のねらいである。

常総地域の後期・終末期古墳の特徴である箱式石棺や板石組横穴式石室、石棺系石室など、片岩利用の埋葬施設の地域的展開や変遷を整理し、儀礼の系譜とその推移を跡付けた。墳丘と石棺・石室の構築状況、土器の儀礼や埴輪配置の特質と変遷をみると、前・中期から後期へと継続する祭祀儀礼の連続性が顕著であるのに対し、7世紀初頭頃の後期・終末期の境界には大きな変化が認められた。この変化は、当該地域において、前方後円墳の築造や埴輪配置が盛行する古墳時代後期後半の突然の事態だった。本章では、ここに大和政権とその地域連合における政治的変革を想定し、本論で提示した前方後円墳築造儀礼の観点から、前方後円墳の思想的、政治的両面の終焉を意味する大きな時代の画期にあたると考えた。

第1章から9章の検討結果をふまえて、序章で提示した論点について見解をまとめてみる。

1点目の祭祀儀礼の系譜について、第2章で検討した埋葬施設上の土器祭祀は、弥生時代の在地首長墓祭祀の系譜上にあり、発信源である吉備地域を核とする列島規模の首長連合の中で東西日本へと波及した。前期古墳に継承され、その後祭祀の場を変えながら古墳時代後期まで連綿と継承される。前方後円墳の外表施設として欠かせない壺形埴輪や円筒埴輪も、畿内と吉備の弥生墳丘墓の土器祭祀にその源流が辿れる。

一方、盾持人物埴輪や家形埴輪の検討から、神仙思想に基づく中国の思想的影響が認められた。盾持人物は中期初頭から、家形は前期中葉から現れ、神仙思想の影響は前方後円墳出現期から浸透していた可能性が高い。三角縁神獣鏡のような神仙観に彩られた鏡の副葬もまた中国思想の影

響を示すものであろう。

本論で提示した前方後円墳築造儀礼の理念は、中国伝来の神仙思想が内包する辟邪と奉仕の思想にあると考えている。古墳の外表施設である埴輪の配置は、他界の舞台装置としてまさにその思想を体現していたと言えよう。この思想は、円筒埴輪や壺形埴輪が弥生墳丘墓の土器供献祭祀から発展・成立しつつ、前方後円墳では「結界と飲食物供献」の装置として「辟邪と奉仕」と同義の役割を果たしていたと考えられることからすれば、埴輪配置の初源の時期から始まって、形象埴輪や人物埴輪が出現する古墳時代中期にかけて整備拡充されていったものと思われる。つまり、前方後円墳の築造とその儀礼への中国思想の影響は、地域や社会への浸透の程度は検討課題とするとしても、大王墳や首長墳においては古墳築造から埋葬・埋納にいたる行為や儀礼の全体に認められ、前方後円墳出現期からすでに神仙思想が体系的に導入されていた蓋然性は高い。

2点目の祭祀儀礼の秩序と階層性については、すでに古墳時代前期から、前方後円墳の築造が総体として被葬者の階層差を表示していたことを指摘したい。本論では、前期古墳の検討から、墳丘形態や規模、儀礼としての土器祭祀、外表施設としての埴輪配置など前方後円墳の築造と祭祀儀礼に関わる異なる構成要素の多くの点で、階層表示がなされていることを検証してみた。前方後円墳と前方後方墳、その大小、埋葬施設上土器祭祀の存否、円筒埴輪と壺形埴輪と、個別の要素ごとの秩序によって階層が表現されていることを明らかにした。

中期になると、前期の階層表示の内、前方後方墳や壺形埴輪などが終焉する。これらは、弥生時代終末期の系譜を背景に、前方後円墳や円筒埴輪に対峙して劣位に位置づけられた階層表示である。前方後方墳に顕著に認められた埋葬施設上の土器祭祀なども、首長墳からはこれらとほぼ同時に姿を消している。前期古墳の階層秩序は、広瀬和雄の指摘にもあるように日本列島をおよそ西と東に分かつ地域偏差的な優劣関係で、中期になると、優位にあった西日本の構成要素である前方後円墳や円筒埴輪に単一化されたものと考えられる。後述する前方後円墳くびれ部の造り出しも、上記のような祭祀儀礼の秩序変動に連動して出現する。一つの目的として、墳頂部に代わる儀礼の場としての側面をもっているが、一方では墳頂部に対して下位の施設として、従属的な埋葬が行われる場合もあった。

中期に認められる階層表示の単一化、齊一化の傾向は、中期を経て後期になって進展したようである。畿内地方では、古墳時代後期になると埋葬施設が横穴式石室に齊一化され、石室の規模の差でもって明確で統一的な階層秩序が整備されたと考えられている。ただこれも、6世紀における畿内の身分制の一面を捉えたものと思われる。第9章で検討した古墳時代後期の常総地域の事例は、前方後円墳に大小の箱式石棺や複数系統の横穴式石室など多様な埋葬施設が採用され、墳頂部などの古墳の中心部だけでなく墳丘裾部の地表下にも構築されている状況を確認した。このような埋葬施設にみられる格差構造の錯綜した様相は、ミヤケ制や部民制に象徴される制度的身分制とは程遠い、前期以来のまさに古墳時代的な階層表示として注視すべきであろう。

3点目の祭祀儀礼の波及と政治動向については、古墳時代前期の論題を中心に検討した。前期大和政権の進出と古墳の波及は、弥生時代からの出自や系譜を重視する祭祀儀礼の創出とその政治的な管理運用に特徴があること、東日本では東海西部地域が重要な役割を果たしており、地域

的には東海道筋が重視されていたことなどをまずは指摘しておきたい。

弥生時代後期の吉備地域に発達した埋葬施設上の土器祭祀は、終末期には在地首長墓祭祀として、山陰・北陸の日本海沿岸や東日本を中心に波及する。第2章では、この喪葬儀礼にあらわれた共通性を政治的に捉え、大和を中枢とする前方後円墳の出現に先行して、吉備を中心に列島各地の首長層の間に何らかの連合関係が成立していたことを示唆するものとして注目した。また、前方後円墳の出現と連動して創出された埴輪配置の儀礼も、吉備地方を源流とする円筒埴輪が西日本を中心に波及するのに対し、畿内地方を源流とする壺形埴輪は東日本や九州を中心に波及することを明らかにした。これらは、福永伸哉が主張する統合儀礼の戦略的管理とそれへの参画という視点でみると、その成立過程として注視すべきものと思われる。

東日本、とくに関東地方への祭祀儀礼の波及の問題については、前方後方墳・前方後円墳の波及や埴輪の波及など前方後円墳築造儀礼の核となる論点に関してあらためて考えてみたが、古墳時代前期の東山道筋の地域と東海道筋の地域との間にいくつかの異なる様相が認められた。第1章では上野には初期埴輪の事例が多く、総・常陸・下野に顕著な埋葬施設上の土器祭祀が認められないこと、第4・5章では前方後方墳・前方後円墳出現期において、上野には群集する低墳丘の前方後方墳が目立ち、常陸・下野の前方後方墳には孤立した中規模墳が多いこと、また上野の初期の器台形埴輪が中規模以下の前方後円墳にとどまるのに対し、常陸のそれは東日本では破格の規模の前方後円墳に採用されていることなどを指摘した。本論ではこれらを、東海道筋を重視した初期大和政権の政治・戦略的な動向として捉えた。

古墳時代中期以降に関しては、大和政権が主導した埴輪の創出とその配置について、形象埴輪の中で普遍的かつ不可欠な存在だった家形埴輪や盾持人物埴輪がいずれも全国の主要な各地に波及し中核的な役割を果たしていたこと、また、前方後円墳築造儀礼の理念として重要だった埋葬における辟邪密封の思想が、関東の一地方においても前方後円墳時代の終末まで徹底されていたことなどを検証した。おそらく、古墳時代中・後期の政治体制も、畿内政権が突出した中心性を確立しながら、地方に対してはやはり儀礼の波及が大きな意味をもっていたと想定される。

4点目の祭祀儀礼の場と形の変遷については、まずは埴輪頂部における祭祀とくびれ部における祭祀とを比較し、後円部埴輪頂の性格の変化について言及した。第1章では、埋葬施設上の土器祭祀とそれ以外の特定の場所での土器祭祀に分類し、土器と古墳両者の検討から相対的に前者が先行するものと考えた。さらに第6章の検討から、弥生時代後期の在地首長墓祭祀の系譜をひく埋葬施設上の土器祭祀は、畿内では前方後円墳出現後まもなく後円部方形埴輪列の外に移動し、前期後半頃には後円部埴輪頂に代わる祭祀の場として方壇の台形状施設が附設されたと考えた。このような変遷は、亡き首長の神聖化に伴い埋葬の場である後円部埴輪頂が聖域化したことによるものと理解し、前方後円墳くびれ部に成立する造り出しはその延長上に位置付けられると解釈した。

上記のような後円部埴輪頂の土器祭祀から台形状施設の附設、さらにくびれ部造り出しの成立へと至る推移は、祭祀儀礼の場の変遷だけでなく土器祭祀の形態変化をも伴うものであった。それは、山陽・山陰地方の弥生墳丘墓に起源する壺・器台・高杯形土器の伝統的な祭祀形態から畿内系の棒状高杯と埴形土器を用いた祭祀への刷新であり、大和政権がその成立時から抱える出自や

系譜関係を払拭し、古墳時代中期の専制化へと始動する政治変革に連動するものと考えられる。

つづく後期古墳における祭祀儀礼の大きな変化は、横穴式石室を新たな儀礼の場とする所にある。これは、5点目の祭祀儀礼からみた後期古墳の変質につながる問題である。

古墳時代後期の初めにおこった朝鮮半島南部から伝来した畿内型横穴式石室の普及・定着は、大陸からの新たな他界思想の導入を促したとする考えが通説化している。だが、普遍的にみられる土器を用いた祭祀儀礼の形態は、前・中期からの伝統を継承するものであった。このことは、本論第9章の常総地域の検討からも追認され、前方後円墳終焉後の終末期になって、石室外の墓道に長頸壺を破碎・廃棄する儀礼行為に変化することも確認された。

さらに、全国的な家形埴輪や盾持人物埴輪の検討から、古墳時代前期から後期へと続く中国の神仙思想を起源とする他界観念の存在を指摘した。前期の壺形や器台形埴輪の配列にはじまり、家形埴輪や器財埴輪、人物埴輪などを加え発展整備される形象埴輪群は、古墳に神仙界を演出する舞台装置である。本論では、これらが前方後円墳の儀礼体系の本質を具現化しているものと考え、この思想が連綿と後期まで受け継がれていることを重視し、強調したい。

最後に以上の要点を、前方後円墳の時代的特質と画期の視点から、結論的に整理すると以下のようである。

前方後円墳の出現とともに創出された儀礼体系は、弥生時代に行われた在地首長墓祭祀の系譜を受け継ぎつつ、中国伝来の神仙思想の要素が導入されて形作られたものである。大和政権は、この「前方後円墳築造儀礼」の共有化を梃子に、各地域の首長層を一定の階層的身分秩序に編成し、列島各地への勢力伸張を図った。この儀礼体系は、王権の専制化に向けて中期初頭にその改革が図られたが、後期まで一貫して一つの政治体制を維持するイデオロギーとなっていた。ところが、古墳時代後期末葉の7世紀初頭頃になると、前方後円墳の築造、埴輪配置による他界の演出、埋葬施設の密封や被葬者への飲食物の供献など、神仙思想に由来する儀礼体系が根本的に廃止されることとなった。大和政権の成立とともに制度化された特色ある儀礼体系が終焉を迎えた後期末葉は、前方後円墳が思想的にも政治的にも従来の存在意義を失う大きな歴史上の画期にあたる。これに続く飛鳥時代や律令制の時代は、古墳時代の継承・発展の結果というよりも、そのイデオロギーを否定し、思想や政治体制の変革の上に成立した新たな時代と評価すべきである。